

橈骨頭脱臼を合併した橈骨頸部骨折に対する Monson 法の経験

○深澤 晃盛 立木 北斗 山本 章輔 堀井 聖哉 野島 良子 (北多摩支部 野島整形外科)

キーワード：橈骨頸部骨折 橈骨頭脱臼 Monson 法 保存療法

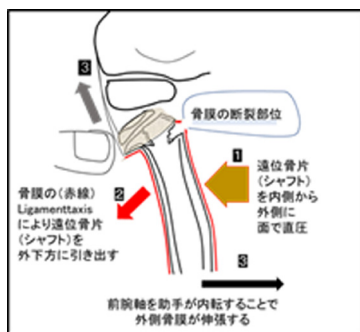
【目的】 Monson らは 2009 年に橈骨頸部骨折に対する新しい整復法を報告している。この方法は従来の Paterson 法と異なり輪状により固定された橈骨頭に遠位骨片を長いレバーアームを用いて合わせにいく方法である。本邦では山中らが 2014 年に麻酔下での Monson 法の経験を報告しており、高度転位例にも対応出来るとしている。今回我々は、橈骨頭前方脱臼に伴う橈骨頸部骨折 (外方傾斜角 30°) の 1 例に対し本法を経験したので考察を交え報告する。

【対象および方法】 症例は 11 歳の男児で、J ボードに乗っていた際に転倒して手をつき受傷した。受傷後に当院に来院し、肘関節外側部の疼痛を訴え、肘関節可動域は 80° ~ 100° 程度に制限され、前腕回旋運動の自動運動は不能、他動運動は回外 45° 程度まで可能であった。橈骨頸部に限局性圧痛、変形を触知し、橈骨頭の浮遊感があったため指導医へ精査を依頼した。なお神経症状 (PIN 麻痺) は認めず、橈骨動脈の拍動は正常であった。



(図 1 受傷時単純 X 線画像 左は肘関節前後像で橈骨頸部骨折、右は側面像で橈骨頭前方脱臼を認める)

【徒手整復法 Monson 法のイメージ】



徒手整復は、3 人でおこない助手 1 は上腕部内側に支点を置き上腕軸を固定する。助手 2 は前腕 60° 程度の回外位 (骨折凸側を前内方に向ける) を保持して前腕を牽引しながら内転する。術者は右手 4 指で橈骨骨幹部を内側から外側に向けて面直圧する。左手母指は近位骨片外側にあてがい近位骨片を外側から圧迫する。この力を持続していると安楽として骨折部は整復感とともに整復される。

次いで尺骨前外方凸変形に対して持続的圧迫力を加え、近位橈尺関節の適合性を増し、肘関節を伸展した後肘内障第 2 法を行い肘関節 90° ~ 100° 付近で再度整復感を触知し、整復完了となった。



図 3 左は実際の整復、右は外固定を示す。

【外固定】 外固定は最初の 2 週間は肘関節鋭角屈曲位として、その後 2 週間は circular cylinder cast として 4 週間外固定した。

【整復後単純 X 線検査】



【経過】 最終時の可動域は健側比 100%、上肢筋力は MMT5 で、疼痛の訴え等無く受傷後 5 ヶ月で治癒となった。



図 5 最終観察時の単純 X 線検査

【考察】 本法は輪状靭帯により固定された橈骨頭に橈骨骨幹部を合わせにいくため骨膜による ligamentaxis が得られやすく、さらに長いレバーアームでその操作を行なえるため従来の整復法より効果的である。合併症の橈骨頭脱臼が肘内障の様な状態であれば、橈骨頭は整復方向に対し固定された状態にあり本法を行う上で問題は感じ無かった。

【結語】 橈骨頭前方脱臼を合併している場合でも外側支持組織の安定性を確認することで本法は橈骨頸部骨折に対して有効な整復法であると考えられる。

(画像提供医 きよせ松山クリニック 松村医師)